



3日間にわたる地球研の研究プロジェクト報告会が先日無事終了しました。今回は、第三期中期計画期間（2016～2021年度）に入って最初の報告会でもあり、新しいプログラム方式の方向性なども含めて、活発な討論がなされました。ここで議論されたひとつの論点は、「地域」であったように思います。地球研は、もちろん、「地球環境」を研究してきたわけですが、自然と人間の係わり合いや、人間活動が自然に与えている影響について考えると、どうしても人間が住んでいるその場所、すなわち「地域」における問題を、まず考える必要があります。

地域は多様です。自然もそこに住む人たちの生業や文化もさまざまです。何に着目するかによって、その空間スケールも異なります。そのことも踏まえた上で、それぞれの地域で豊かに幸せに生きることとは何か、その社会の持続可能（あるいは未来可能）なあり方はどうか。そこに生じている環境問題、社会の問題をいかに解決していくか。今回発表のあったすべてのプロジェクトは、これらの問題について、異なる地域とさまざまなアプローチで取り組んでいます。過去を扱っている羽生プロジェクトや中塚プロジェクトでは、これらの問いが過去形としてまず問われ、そして現在あるいは未来へのメッセージとしても語られています。

問題は、それぞれの地域から提起された問題が、地球上の他の地域とどのように関連しているのか、あるいは、ある地域での問題が他の地域にとってもどの程度共通した問題なのか、そしてより広域の地域にとって、さらに地球社会全体にとっての意味はどうかなど、より重層的に統合的に理解し、解決できる道筋を考えていくことです。

私たち一人ひとりの人間は、ある地域で生きている存在ですが、その地域もひとつだけではなく、その人の生き方により、いくつかの地域に重層的に関わりながら生きています。そして同時に、忘れてはならないのが、誰もが地球に生きているということです。地域と地球を行き来する思考がとても大切だと思います。

地球研のめざす「総合地球環境学」は、地域から地球まで、どう関連させながら、人と自然のあり方、あるべき地球社会を探っていけるかが問われていると思います。このために、第三期中期計画では、プログラム方式を取り、プロジェクト間の連携や研究部と研究基盤国際センター間の連携を活発化することを進めています。研究の新たな発展を促すためには、所内においても、一人ひとりが所内の「地域」を行き来することにより「サイロ*」に入り込んでしまわないようにすることも大事かと思えます。